



藻で食と環境を考える

私は釣りが趣味で、たまに海に小舟を浮かべながらルアー釣りを楽しんでいます。ところが何度か、海中に藻が発生したときがあります。このときは、ルアーがうまく落ちていかず、坊主（一匹も釣れないこと）に終わり悔しい思いをしたときがありました。しかし、この「藻」ですが“未来の栄養食”と言われていることをご存じてでしょうか？

この「藻」を活用した給食が6月に静岡県袋井市の小中学校の給食として登場したのです。日本で初めてという一風変わった試みは藻類の培養・研究に取り組むイービス藻類産業研究所（宮城県石巻市）の協力で実現しました。研究所は、とても小さな藻「ナンノクロロプシス」の培養や研究、関連商品の開発に取り組んでいます。献立はご飯、黒はんぺんの揚げ物、大根の香りあえなどで、一見普通のメニューに見えますが、揚げ物の衣に藻の「ナンノクロロプシス」の粉末を加えてありました。ナンノクロロプシスは栄養価が高い上に海水中で半永久的に培養でき、将来食料危機が予想されている中、貴重なタンパク源の一つとして期待されています。藻類は培養過程で二酸化炭素を吸収するため、環境分野での注目も高まっているそうです。今回の給食は、食料問題や環境問題に大きく関わる食材に触れることで、持続可能な開発目標（SDGs）に対する理解を深めてもらおうと企画したそうです。



藻を食べた子供は「おいしかった。藻に抵抗はなかった。」「黒はんぺんは苦手だったけど、藻と一緒に食べられた。」と話すなど、好評でした。

藻を食べた子供は「おいしかった。藻に抵抗はなかった。」「黒はんぺんは苦手だったけど、藻と一緒に食べられた。」と話すなど、好評でした。

次に海上で藻と出会っても、優しい気持ちの自分でいたいと思います。

帯西校歌の秘密 その①

帯西の校歌には、校区の歴史やそれに関わる話があります。まず、校歌に「託麻野に」とついていることが、珍しいです。この「託麻野」というのは、帯山西校区一帯の昔からの呼び名です。今からずっと昔の奈良時代、この託麻野では、紫を植え、育てていました。昔から、紫色は高貴な色として大切にされ、紫色の着物を着る人は、とても身分の高い人だけだったのです。そして、託麻野に植えられていた紫の根が、布を紫色に染めるために使われていたのです。この「紫色」ですが、紫の根から採った色だから、紫色と名付けられたのです。つまり紫色というのは植物の紫由来だったのです。

紫のことは、日本で一番古いと言われている歌集「万葉集」にもいくつか使われています。その中に、帯西校区*のことを歌った歌があります。

託馬野に生(お)ふる紫衣(きぬ)に染(し)め いまだ着ずして色に出にけり

これは、笠女郎(かさのいらつめ)という女性が、万葉集の編者と言われている大伴家持(おおとものやかもち)におくった歌です。「託麻(馬)野に生えている紫を衣に染め付けて、まだ着てもいないのにみんなに知られてしまいましたわ。」という歌です。一見意味が分かりにくい内容ですが、これは「家持という紫草で笠女郎の心が染まった」という意味で、まだ着てもいないのに色に出たとは「まだ想いが成就してもいないのに人に知られてしまった」ということのようにです。情熱的な歌ですが、万葉集にも歌われているくらい歴史がある校区ということがわかります。

*託麻野には、滋賀説と熊本説があるそうです。